

エールフランスが新型エコ燃料 食用油入り5000km飛行

2021/6/23 2:00 | 日本経済新聞 電子版

NIKKEI
BUSINESS DAILY
日経産業新聞



エールフランスKLMは環境配慮型の燃料への切り替えを急ぐ=ロイター

【パリ=白石透冴】航空大手の仏蘭エールフランスKLMが環境負荷の低い航空燃料の導入を急いでいる。5月には使用済み食用油を使って作った燃料による試験運航をフランス―カナダ間で実施した。筆頭株主である仏政府の意向も背景にあり、同社は2030年までに温暖化ガス排出量を05年比で実質半分にする目標達成に弾みをつける。

パリ―モントリオールを試験飛行

試験運航で使った燃料はエールフランスKLMのほかエネルギーの仏トタル、航空機メーカーの欧州エアバスなどが協力して開発した。トタルが南仏ブッシュドローヌの施設などを利用し、使用済み食用油から燃料を精製した。

試験ではエールフランス機がパリ郊外のシャルルドゴール空港からカナダのモントリオールまで5千キロメートル超を飛んだ。通常の航空燃料に「SAF（持続可能な航空燃料）」を濃度

16%で混ぜ、従来比で15%減に当たる20トンの二酸化炭素（CO₂）排出減につながったとしている。

エールフランスKLMはこれまで試験飛行を実施したことがあるが、今後はSAFの導入を急ぐ考えだ。同社はCO₂の排出についても、30年までに単位輸送量当たり05年比で半分にする目標を掲げている。

背景に仏政府の環境政策

エールフランスKLMの取り組みの背景にあるのは、仏政府の方針だ。仏政府は20年、フランス発の全ての航空便の燃料について、22年までに食用油由来のようなバイオ燃料の割合を1%まで高める目標を掲げた。仏メディアによると、19年時点での割合は0.04%だった。割合を25年に2%、30年に5%に高める予定で、仏政府が筆頭株主であるエールフランスKLMは経営努力を求められている。



環境経営には仏政府の意向も反映される（バイデン米大統領⑤と歩くマクロン仏大統領）=ロイター

消費者の環境意識の高まりを受け、航空業界への風当たりも強くなっている。航空機が出す温暖化ガスは鉄道の数十倍との試算があり、環境活動家グレタ・トゥンベリさんの呼びかけなどで、飛行機の利用を「飛び恥」と批判する人も出てきている。各社は消費者の航空機離れを防ぐためにも、環境配慮型の事業展開が必須となっている。

コスト「少なくとも3倍」

SAFの活用は航空各社が興味を示しているが、課題は燃料コストだ。仏経済紙レゼコーによると、SAFは少なくとも通常の3倍のコストがかかる。燃料コストは売上高の2割前後を占めるため、利益を大きく左右する。仮に航空券に転嫁したとすると、ロンドン—ニューヨーク間にSAFを濃度15%分混ぜて飛ばした場合、航空券が1人当たり10ドル（約1090円）高くなる可能性がある。

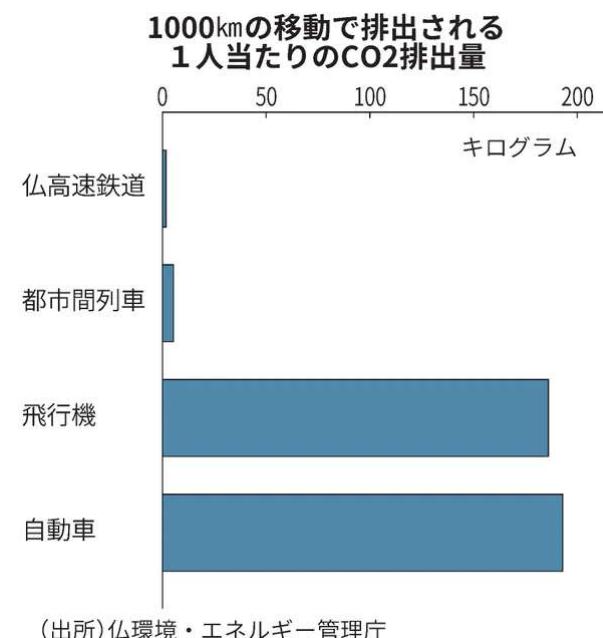
▼消費者や政府、変革促す

国際エネルギー機関（IEA）によると、世界で航空機の飛行による二酸化炭素（CO₂）排出量は10億t近くに上る。化石燃料による排出全体の3%に当たる。「航空機は環境に悪影響がある」と受け止める消費者を意識し、航空各社は環境負荷を減らそうと試行錯誤している。

IEAのまとめでは、航空部門のCO₂排出量は2000年以降、年2%で増え、現在までに1.5倍に膨らんでいる。ただ飛行距離は同じ期間に年5%のペースで伸びており、技術発展で排出量を抑えながらの運航が可能になってきたことがうかがえる。

水素燃料に期待する声もある。欧州工アバスは20年9月、水素燃料を使った航空機を35年までに商用化するとの目標を発表した。再生可能エネルギー由来の水素を使い、まず3種類の試作機を作る。水素は燃やしても水が出るだけで、CO₂を排出しない。

新型コロナウイルス禍の影響で、航空各社は政府支援を相次いで受けている。支援の条件として環境対策を求められる例もあり、変革を後押しする可能性がある。



本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。